

Title	動物の幼児図式に関連する特性が援助要請の原因帰属及び援助行動に与える影響
Author(s)	岸本, 渉
Citation	対人社会心理学研究. 2 P.103-P.110
Issue Date	2002
Text Version	publisher
URL	https://doi.org/10.18910/6025
DOI	10.18910/6025
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/repo/ouka/all/>

動物の幼児図式に関連する特性が援助要請の原因帰属及び援助行動に与える影響^{1) 2)}

岸本 涉(大阪大学大学院人間科学研究科)

本研究は、動物の幼児図式に関連する特性が人間の援助行動における帰属論的生起過程に与える影響について検討するため、犬の画像を用いた場面想定法による質問紙調査を行った。犬画像は幼児図式に関連する特性を持つ画像と持たない画像を用い、文章で提示された援助状況において、援助要請の原因に対する犬の統制可能性、回答者の哀れみ感情及び怒り感情、援助選択の有無を問う項目を測定した。回答者は学部生、大学院生289名(男性145名・女性144名)であった。調査の結果、犬の幼児図式に関連する特性は帰属認知に対して影響を与えておらず、また帰属認知の生起感情、援助行動に対する影響も非常に弱いことが示された。その一方で、幼児図式に関連する特性が哀れみ感情、援助選択に対して直接的に影響し、また哀れみ感情を媒介し援助選択に影響する間接的影響についても認められており、いずれも幼児図式に関連する特性が人間の援助行動を促進する方向で作用することが示された。これらの結果は、幼児図式に関連する特性が帰属論的生起過程の先行要因に影響することなく、人間の感情、行動に影響を与え、援助行動を促進することを示すものである。

キーワード: 援助行動、原因帰属、幼児図式、動物、ペット

問題

帰属論的(attribution)アプローチとは、援助要請の原因に対する帰属認知が、援助者の生起感情に影響を与え、この感情によって援助行動の生起が影響を受ける一連のプロセスに焦点を当てるアプローチである。

この帰属論的アプローチの出発点となった研究としては Ickes & Kidd(1976)が挙げられる。これ以前にも援助要請の原因が内的であるか、外的であるかによって生起する援助行動が異なり、原因が内的であるよりも外的である場合に援助行動が多くなされることを報告する Schopler & Matthews(1965)、Berkowitz(1969)など多くの研究があるが、Ickes & Kidd(1976)はこの内的・外的次元が、より重要な次元である意図性と混同されている点を指摘し、この意図性がより強く援助行動を規定していることを示した。つまり、援助要請の原因が意図的な理由から生じたものである場合、援助者の援助行動はあまり生起しないが、その原因が意図しない理由から生じたものである場合、援助行動が生起する確率はより高くなる。Weiner(1972; 1986)によれば帰属次元の類型として、1)所在(相手にとって原因は内的なものか外的なものか)、2)安定性(原因は一時的あるいは永続的どちらのものか)と受けとめられるか、3)統制可能性(原因は相手が影響を及ぼすことのできるものか・そうでないか)の3次元が挙げられる。Ickes & Kidd(1976)の指摘した意図性次元はこのうちの統制可能性次元に対応しており、この統制可能性に関する原因帰属が続いて生起する援

助行動に大きな影響を与えていることを示す多くの研究がなされている(Barnes, Ickes, & Kidd, 1979; Betancourt, 1990; Meyer & Mulherin, 1980; Reisenzein, 1986; Schmidt & Weiner, 1988; Weiner, 1980)。また、これらの研究では帰属判断がまず生起する感情に影響し、この感情が媒介変数となって援助行動に影響することを示す点についても指摘されている(Betancourt, 1990; Meyer & Mulherin, 1980; Reisenzein, 1986; Schmidt & Weiner, 1988)。ここで取り上げられる感情は多くの場合、2つの感情反応であり、1つは哀れみや同様の感情、もう1つは怒りやいらだちの感情である。次いで、援助者が怒り感情を抱くのは援助要請の原因が被援助者の統制下にあるものと感じられる場合であり、哀れみ感情を抱くのは援助要請の原因が被援助者の統制下にないと感じられる場合である。そして、この生起した感情が続いて起こる援助行動を直接左右することになる。以上に示される帰属 - 援助の感情媒介仮説は、感情的反応の効果を統計的に統制した場合に、統制可能性の帰属が援助行動に与える影響がみられなくなる点や、共分散構造分析を用いたモデルの検討結果などからも多く例示されている。帰属 - 感情 - 援助行動間の関連については、日本でも小嶋(1983)、西川・高木(1989)などで同様の結果が得られている。

一方、援助の対象は人間だけに限らない。日常生活の多くにおいて、われわれは動物を援助対象とし、ペッ

トとして養護行動の対象とすることがある。このような人間の動物に対する養護的反応を規定する要因の一つとしては Lorenz (1971)が示した幼児図式を指摘することができる。この幼児図式とは、丸く大きな頭や広い額、小さな身体、短い手足、ふくらみのある体つき等の形態的特徴や不器用な動作、運動様式等を指し、本来、我々が幼児に応答する際に働く生得的解発機構であるが、これらの特徴を有する対象に対しては、人間以外のものであったとしても、無条件的に養護的感情、愛他的行動が喚起されることが示唆される。また、Archer (1997)は人間とペットの関係を比較行動学的観点から社会的寄生関係にあるものとして位置づけており、その関係を維持する上で重要な特性として寄生者が宿主を操作する際に利用する刺激特徴である社会的リーサーに焦点を当て、特にペットが人間の養護的反応を導き出す上での社会的リーサーとしては、幼児図式に関連する刺激特徴の与える影響が重要であることを示唆している。

この幼児図式に関連する特性は、人間の様々な心理機制に働きかけ、養護的行動を引き起こすと考えられるが、それらはどのようなプロセスを構成しているのだろうか。人間同士の援助行動においては、帰属論的アプローチから示される一連の生起過程が繰り返し確認されているが、これを手掛かりとすると、幼児図式の与える影響は帰属認知、生起感情、援助行動それぞれに対する促進過程の可能性が考えられる。例えば、純真無垢で幼く、たどたどしい存在であることは、外界に対する統制可能性が必然的に低いことを示す。統制可能性が低いということは、ある援助状況において援助者の哀れみ感情を喚起しやすく、その結果、援助行動の生起確率を高めることは援助行動の帰属論的生起過程において想定された知見から十分想定されることである。以上のような媒介過程に加えて、幼児図式に関連する特性が援助行動を促進する方向で、生起感情、援助行動に直接影響を働かせる可能性も考えられる。また、「心の理論」で指摘されるように、人間には他者の様々な精神活動を区別し、その意図を推測しようとする能力が備わっている (Baron-Cohen, 1992)。Archer (1997)は、こういった能力がロボットやコンピューターに対しても過度に帰属される場合があり、特に動物に対して帰属される場合、擬人化を引き起こすと述べている。対象が人間と動物である場合、完全に同じではないにしても、擬人化の効果を通して、人間に対する心理機制と動物に対する心理機制が重なる可能性も考えられる。

以上のような点から、本研究では、特に人間同士の援助行動において明らかとなっている帰属論的アプローチを手掛かりとして、動物の幼児図式に関連する特性がどのように影響するのかという点について検討することが

主な目的となっている。仮説としては以下に示した 3 点が挙げられる。

- (1) 幼児図式に関連する特性は、援助要請の原因帰属に対して影響を与え、より統制可能性が低いという認知を生じさせる。
- (2) 幼児図式に関連する特性は、人間の生起感情に影響を与え、怒り感情を抑制し、哀れみ感情を促進させる。
- (3) 幼児図式に関連する特性は、原因帰属、生起感情に対する影響を通して、人間の援助行動を促進する。

(1)は援助要請の原因帰属が帰属論的生起過程の先行要因である(e.g., Ickes & Kidd, 1976)ため、幼児図式に関連する特性が人間の認知に働きかける場合、原因帰属の判断に影響する可能性が考えられることから想定される。また、(2)は怒り感情と哀れみ感情が帰属認知と援助行動を媒介する変数である(e.g., Meyer & Mulherin, 1980)ため、幼児図式に関連する特性が帰属認知に対して影響を及ぼす可能性や、直接的に生起感情に影響を及ぼす可能性から想定される。さらに(3)は、先行研究において帰属認知が感情に影響し、感情が援助行動に影響する点から想定される。

方法

回答者

摂南大学及び大阪大学所属の学部生、大学院生 300名のうち、無回答、不備があると判断された回答者 5名及び、予備研究と本調査の間で重複して回答していた 6名については削除した。その結果、有効回答者の構成は 289名(男性 145名・女性 144名)、年齢は 18~28歳(平均 19.4、 $SD=1.20$)である。

調査日時

2001年6月及び2001年7月に実施した。

概要

調査は、質問紙による場面想定法を用いて行われた。回答者は調査票において、以下に示す援助状況と犬の画像を提示され、その援助状況における画像の犬を想起した上で、続く質問項目に回答した。調査票の配布については、授業中に一斉配布を行い、その場で回収した。調査票には援助状況(2)×犬の画像(4)=8つの種類があり、各回答者にランダムに割り当てられた。

調査票の構成

(1)回答者の属性 回答者の性別、年齢、生年月日、所属、ペット飼育経験、犬飼育経験について尋ねる項目を設けた。

(2) 援助状況 動物・ペットに対する援助状況及びかわいそうだと感じる状況の自由記述を行い、大阪大学所属の学部生及び大学院生 75 名(男性 37 名・女性 38 名、年齢は 18～29 歳、平均 19.1 歳、 $SD=1.70$)から得られた単位について、大阪大学所属の学部生及び大学院生 12 名(男性 6 名、女性 6 名、年齢は 20～27 歳、平均 23.4 歳、 $SD=2.31$)が分類作業を行い、得られた結果について多次元尺度構成法及びクラスター分析を用いるカテゴリー分析を行った結果、犬が怪我をしている状況 (Table 1)、及び犬がお腹をすかして飢えている状況 (Table 2)の 2 状況を調査で用いることとし、いずれかの状況を示す文章を提示した。

(3) 犬の画像 20 枚の犬画像に対して予備調査を行い、大阪大学所属の学部生及び大学院生 82 名(男性 42 名・女性 40 名、年齢は 18～29 歳、平均 19.1 歳、 $SD=1.66$)から得られた回答結果から、かわいらしさ、愛嬌の特性評価を含む動物の性質に対する接近のしやすさ(山田、2001)の合計得点が最も高い犬画像 2 枚(7 点中 1.49 及び 1.71)と最も低い犬画像 2 枚(7 点中 4.94 及び 4.52)を本調査で用いることとした (Figure 1)。画像は調査票(普通紙)の上にインクジェット方式によりカラープリントされ、配布された。

(4) 援助要請の原因帰属 提示された援助状況における援助要請の原因帰属について、以下の 2 項目を設けた。

。「上述の場面におちいる前に、犬が自分自身でどうに

かできたのではないかと感じる。」

。「上述の場面におちいったのは、たまたま運が悪かったためだと感じる。」

それぞれ「非常によく当てはまる」～「全く当てはまらない」まで 7 件法で尋ねた。生起感情、及び援助選択に最も影響を与える原因帰属次元である統制可能性に関する事象として、前者は能力・努力について、後者は運について尋ねる項目である。

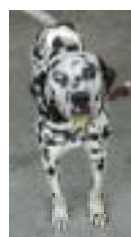
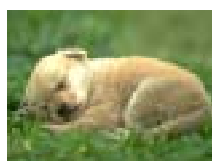
(5) 援助状況における生起感情 小嶋(1983)、西川・高木(1989)、Toi & Batson (1982)を参考に選定された 23 項目を用いて、本調査と同様の場面想定法を用いた予備調査を行った。大阪大学所属の学部生及び大学院生 84 名(男性 41 名・女性 43 名、年齢は 20～29 歳、平均 21.9 歳、 $SD=2.23$)から得られた回答を用いて、犬に対する援助状況における生起感情に対する因子分析(反復主因子法・バリマックス回転)を行った。その結果、固有値基準から 2 因子解を採用し、先行研究と同じく、怒り感情と哀れみ感情の 2 因子を得た。共通性、因子負荷量を考慮し不適切な項目を削除し、再度因子分析を行った結果(累積寄与率 57.8%)について、各因子の因子負荷量が特に高い項目(.70 以上)を本調査で用いることとした。哀れみ感情は「悲しくなる」、「哀れな」、「同情を誘う」、「心配な」の 4 項目、怒り感情は「腹が立つ」、「むかむかする」、「苛立たしい」、「怒りを感じる」、「軽蔑を感じる」の 5 項目であり、計 9 項目(7 件法)で構成される。なお、先行研究における生起感情は、特に援助対象に対

Table1. 犬のケガによる援助状況を表す文章

あなたは、公園のベンチに座っています。ふと正面をみると、この犬(左の写真の犬)が足にケガをして、うずくまっていることに気が付きました。かなり傷が深いのか、自分で歩くことができないようです。

Table2. 犬の飢えによる援助状況を表す文章

あなたは、公園のベンチに座っています。ふと正面を見ると、この犬(左の写真の犬)がかなり弱った足取りで歩いていることに気が付きました。ここ数日何も食べていないのか、しきりに食べ物を探しています。



接近しやすい犬 第1位 接近しやすい犬 第2位 接近しにくい犬 第1位 接近しにくい犬 第2位

Figure1. 本調査で用いた犬画像

して生じた感情を測定しているのに対し、本研究では生起感情は対象を特に限定しない感情として測定している。生起感情の対象については各項目毎に、.犬自身に対して、.犬以外の事柄に対して、.特定できない、のいずれであるかを尋ねる設問を別に設けた。

(6) 援助選択 設定された援助状況に自分自身が直面した場合、どの程度提示された犬を助けると思うかについて、「助ける」～「助けない」まで7件法で尋ねた。

(7) 動物の性質に対する接近のしやすさ 山田(2001)において作成されたSD法による動物の印象測定質問紙のうち、第1因子としてまとめられた項目。全17項目のうち、特に高い因子負荷量(.70以上)をもつ項目として、「かわいらしい - 憎らしい」、「愛嬌のある - 愛嬌のない」、「感じの良い - 感じの悪い」、「親しみやすい - 親しみにくい」、「親近感がある - 親近感がない」、「安心する - 不安な」の計6項目を選択し、本調査において用いることとした(7件法)。かわいらしさ、愛嬌の特性評価を含むことから、本研究では幼児図式が人間に与える印象を測定する尺度項目として用いた。

(8) 動物の容姿 山田(2001)において作成されたSD法による動物の印象測定質問紙のうち、第4因子としてまとめられた項目。このうち、「太っている - やせている」については、本調査における回答を用いて信頼性係数を検討した結果、低い値を示したため除外した。その結果、構成する項目は「見た目が丸い - 角張っている」、「やわらかい - かたい」の計2項目(7件法)。

(9) 動物の幼さ 「幼い - 年老いた」1項目(7件法)。

結果

(1) 犬に対する援助行動の帰属論的生起過程

生起感情を測定した項目について、本調査で得られた回答結果を用い、因子分析(反復主因子法・バリマックス回転)を行ったところ、予備調査と同じ因子構造を得た。クロンバックの係数を算出したところ、怒り感情は.91、哀れみ感情は.76の値を得た。

援助要請の帰属認知として測定された能力・努力、運、生起感情として測定された哀れみ感情、怒り感情、及び援助選択の各変数間についてピアソンの積率相関係数を算出したところ、Table 3 に示した結果を得た。

まず、帰属認知と生起感情、援助選択の関連について、能力・努力は哀れみ感情と負に相関しており、有意傾向ではあるが、援助選択とも負に相関していることが分かる。つまり、援助要請の原因を犬が自分で統制可能だったと感じるほど、哀れみ感情、援助選択が低下するという傾向が示されており、これは先行研究(e.g.,小嶋, 1983)と同様の結果を示すものである。ただし、相関係数はかなり小さな値にとどまっている。一方、運に関する認知は有意傾向であるが哀れみ感情と負に相関しており、能力・努力とは正に相関している。本調査における運の測定は高い値を回答するほど統制可能性の低さを示し、逆に能力・努力は統制可能性が高くなるため、本来であれば、運と能力・努力は負に相関し、哀れみ感情、援助選択とは正に相関するはずであるが、本研究における結果は逆の傾向を示している。本調査における運の測定項目は「たまたま運が悪かった」と感じるかどうかについて回答を求めるものであるが、同意する程度が高い(高値)ほど統制可能性が低下する一方、ネガティブなニュアンスが強まることも考えられ、これが影響した可能性がある。なお運の認知と援助選択の有意な相関関係は認められていない。

また、生起感情と援助選択の関連については、哀れみ感情と援助選択の間で有意な相関係数を得ており、哀れみ感情を強く生起するほど援助行動が多く選択されることが示されている。これに対し、怒り感情と援助選択の有意な相関関係は得られておらず、その一方で、怒り感情は哀れみ感情と正に相関する結果となっている。それぞれの生起感情の対象毎に回答された感情項目の割合を算出したところ、哀れみ感情は3項目中2.51(83.8%)が犬に対して回答されているのに対して、怒り感情は犬に対する回答が5項目中1.42(28.4%)と少なく、犬以外の事柄(1.55、31.0%)、特定できない対象(1.92、38.5%)に対して多く回答されている。これらのことから、怒り感情は様々な対象に対する感情が混合したものであることが示されており、Table 3 に示した相関関係が得られたものであると考えられる。

以上示された結果から、本調査における測定項目として、援助行動の帰属論的生起過程を検討する上で適切な測定は、能力・努力、哀れみ感情、援助選択の3つで

Table3. 帰属認知・生起感情・援助選択間の相関係数

	A	B	C	D	E
A 能力・努力	1				
B 運	.28 ***	1			
C 哀れみ感情	-.13 *	-.11 †	1		
D 怒り感情	-	-	.15 **	1	
E 援助選択	-.11 †	-	.42 ***	-	1

N=289(但し怒り感情のみ欠損値のためN=288) † $p < .10$ * $p < .05$ ** $p < .01$ *** $p < .001$

あることを指摘できる。

次いで、帰属認知と援助選択の生起感情による媒介過程を検討するため、哀れみ感情を統制変数とした能力・努力と援助選択の偏相関係数を検討したところ、Table 3 においては有意傾向であった相関係数が有意ではなくなっている ($r=-.07$, ns)。これは、非常に弱いながらも、哀れみ感情が能力・努力認知と援助選択を媒介する傾向を示すものであり、Meyer & Mulherin (1980) や小嶋 (1983) と同様の結果を示すものである。

(2) 犬に対する接近のしやすさが帰属認知・生起感情・援助選択に及ぼす影響

接近しやすい犬画像 2 枚について回答した回答者を接近しやすさ高条件、接近しにくい犬画像 2 枚について回答した回答者を接近しやすさ低条件とする。この犬画像条件を独立変数とし、犬の接近しやすさ、容姿、幼さを従属変数とする t 検定を行ったところ、接近高条件の犬は低条件の犬よりも、接近しやすく ($t=21.36$, $df=287$, $p<.001$: 高=6.45, 低=3.91)、丸く柔らかい容姿であり ($t=21.89$, $df=287$, $p<.001$: 高=6.34, 低=3.47)、幼い ($t=23.32$, $df=287$, $p<.001$: 高=6.59, 低=3.27) ことが示されている。なお、犬の特性評価間の相関係数について検討したところ、接近のしやすさ・形態間で $r=.79$ ($p<.0001$)、接近のしやすさ・幼さ間で $r=.77$ ($p<.0001$)、形態・幼さ間で $r=.73$ ($p<.0001$) の値が得られており、それぞれ強い正の関連にあることが分かる。以上の結果は本研究における幼児図式の操作的定義、及び条件操作の妥当性を示すものである。

犬の性質に対する接近のしやすさが諸変数に及ぼす影響について検討するため、接近高条件と接近低条件の 2 水準を独立変数とし、帰属認知、生起感情、援助選択を従属変数とする t 検定を行った (Table 4)。その結果

接近高条件の犬に対しては怒り感情が低く ($t=-2.9$, $df=284$, $p<.01$)、哀れみ感情が強く ($t=3.27$, $df=287$, $p<.01$)、援助選択が多く行われる傾向にある ($t=5.51$, $df=283$, $p<.001$) ことが示されている。以上の結果は、Lorenz (1971) において指摘された幼児図式に関連する特性の影響を支持する結果となっている。

しかしその一方で、援助要請の帰属認知である能力・努力 ($t=0.99$, $df=287$, ns)、運 ($t=1.46$, $df=286$, ns) の 2 項目に関しては、接近のしやすさ条件間では有意な差は得られなかった。これは、援助行動の帰属論的生起過程の先行要因に幼児図式に関連する特性が影響し、援助行動を促進するという本研究の仮説を棄却する結果である。

(3) 共分散構造分析を用いた諸変数間の影響関係

以上示された結果を含め、犬に対する接近のしやすさ、帰属認知、生起感情、援助選択間の影響関係を検討するため、共分散構造分析を用いた検討を行った。諸変数のうち、帰属認知として能力・努力、生起感情として哀れみ感情を投入変数として扱った。先行研究における結果及び本研究における仮説を考慮し、能力・努力が哀れみ感情に影響し、哀れみ感情が援助選択に影響すると仮定し、これら 3 変数それぞれに犬の接近のしやすさが影響するモデルを設定した (なお、投入された諸変数間の相関係数については Table 3、Table 5 を参照)。

分析の結果、接近のしやすさが能力・努力に対して及ぼす影響は有意でないことが示され、最終的に選択されたモデルとして Figure 2 に示された結果を得た。なおモデルの適合度指標については Table 6 に示した通りである。

Figure 2 において、能力・努力は哀れみ感情に影響し、次いで哀れみ感情は援助選択に影響しており、哀れみ

Table4. 犬画像の接近のしやすさ条件別にみた援助状況における帰属認知・生起感情・援助選択に対する t 検定結果

	接近のしやすさ				
	高条件 (N=147)		低条件 (N=142)		
	Mean	SD	Mean	SD	
原因帰属					
能力・努力	2.34	1.68	2.16	1.36	
運	3.59	1.89	3.28	1.72	
生起感情					
怒り感情	2.57	1.69	3.16	1.76	***
哀れみ感情	6.00	0.90	5.55	1.36	***
援助選択	5.23	1.67	4.10	1.82	***

*** $p < .001$

Table5. 犬に対する接近のしやすさと能力努力・哀れみ感情・援助選択間の相関係数

	能力・努力	哀れみ感情	援助選択
犬に対する接近のしやすさ	-	.29 ***	.46 ***
N=289			*** $p < .001$

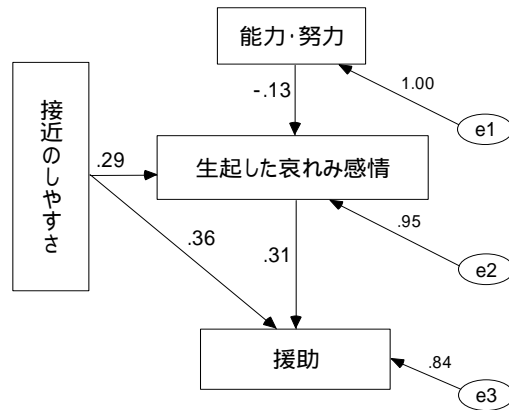


Figure2. 最終的に選択されたモデルにおける諸変数間の影響関係
e1 ~ e3は誤差項

Table6. Figure2におけるモデルの適合度指標

χ ² 検定								
χ ² 値	DF	P	GFI	AGFI	AIC	RMSEA	Hoelter	.01指標
2.705	2	0.259	0.995	0.977	18.705	0.035		978

Table7. モデルに投入された各変数間の標準化総合効果

	接近のしやすさ	能力・努力	哀れみ感情
哀れみ感情	.29	-.13	-
援助選択	.45	-.04	.31

感情が帰属認知と援助選択の媒介変数として作用していることが共分散構造分析においても支持される結果となっている。しかし、犬に対する接近のしやすさが影響を及ぼす変数は哀れみ感情と援助選択であり、能力・努力に対する影響はないことが示されている。これはTable 4において示された結果と同様に、幼児図式に関連する特性が援助行動の帰属論的生起過程の先行要因には影響しないことを示す結果である。ただし、犬に対する接近のしやすさが哀れみ感情を媒介する形で援助選択を促進し、また直接的にも援助選択を促進する効果がある点については支持する結果が与えられている。以上のような関連はLorenz (1971)、Archer (1997)が示唆するような、幼児図式が及ぼす人間の養護的反応に対する影響を支持する結果であるといえる。

なお、各変数間の直接効果、間接効果を合計した標準化総合効果について算出したところTable 7に示した値を得た。能力・努力は援助選択に負の影響を与えているものの、非常に弱い作用しか及ぼしていないことが示されている。また、哀れみ感情は強く生起するほど援助選択を促進するが、援助行動の促進という点に関しては犬に対する接近のしやすさが最も強い影響を与えており、接近しやすいと感じられる犬ほど援助行動の選択傾向が最も強く生起することが示されている。

考察

本研究において幼児図式に関連する特性とは、動物の性質に対する接近のしやすさ(山田, 2000)、動物の容姿(山田, 2001)、動物の幼さによって特徴づけられるものである。本調査で設定された接近のしやすさ高条件の犬画像は低条件の犬画像に比べて丸く柔らかい形態をしており、幼く、かわいらしいと評価されている。これら特性間の関連は、紛れもなくLorenz (1971)が人間の生得的解発機構を論じる際に指摘した幼児図式に関連する特性であり、幼児図式による認知、感情、行動に対する影響をある程度適切に扱っているものと考えられる。

本研究における仮説として、幼児図式に関連する特性は、援助要請の原因帰属に対して影響を与え、より統制可能性が低いという認知を生じさせると考えられた。本調査で測定された援助要請の帰属認知である能力・努力と運の認知に対し、犬の接近のしやすさ条件別に差がみられなかったこと(Table 4)、また、犬に対する接近のしやすさと能力・努力の間には有意な相関係数は確認されず(Table 5)、接近のしやすさが能力・努力に対して及ぼす影響が共分散構造分析においても確認されなかったこと(Figure 2)から、上記の仮説は棄却されるものと考えられる。このことは、相対的には幼児図式に関連する特性を備えた犬が、そのような特性を持たない犬に比

べて、人間に原因帰属認知の差を生じさせないことを意味しているが、その一方で、どちらの犬においても“(援助状況を招いた原因を)犬は行うこともできなかった”と人間に認知されていることが示されており、人間にとっては対象となる犬が成長した犬である場合にも、統制可能性が低く認知される存在であることが示唆されている。このことは、接近しやすい犬と接近しにくい犬に対する援助行動の差が原因帰属の差によって説明されない一方で、犬全体としては潜在的に援助対象となり得る可能性を示すものである。原因帰属と感情、援助行動の関連について、非常に弱い関連ではあるが、能力・努力に対する認知は特定できない怒り感情と正に、犬に対する哀れみ感情とは負に相関しており、自分自身で援助状況の原因を犬が統制できたと認知した場合、怒り感情が生起し、哀れみ感情が促進されるという結果が得られている (Table 3)。また、共分散構造分析の結果 (Figure 2) や、哀れみ感情を統制する偏相関分析の結果から、非常に弱いながらも能力・努力に対する認知が感情を媒介して援助行動に影響を及ぼす傾向にあることを指摘できる。これらのことは、Meyer & Mulherin (1980) や Reizenzein (1986)、小嶋(1983)、Betancourt (1990) などで繰り返し報告されてきた、帰属認知を先行要因とする感情の媒介過程であり、同様の関連が動物に対する援助行動という文脈においても、その傾向が確認されたということになる。

次に、幼児図式に関連する特性が、人間の生起感情に影響を与え、怒り感情を抑制し、哀れみ感情を促進させるという仮説に関しては、ほぼ支持されたということができる。Table 4 に示されたように、犬の接近のしやすさ条件高低間において、援助状況における哀れみや怒り感情に有意差が認められており、接近しやすく、かわいらしいと感じられる犬に対しては怒り感情が低く、哀れみ感情が強く報告されており、これとは逆に、接近しにくくかわいらしくない犬に対しては怒り感情を強く生起し、哀れみ感情が低く評定されている。これと同様の結果は、Table 5、Figure 2 における犬に対する接近のしやすさと哀れみ感情間の相関、影響関係においても示されている。以上示された知見は、犬の幼児図式に関連する特性が援助行動を促進する方向で哀れみ感情、怒り感情に影響していることを支持する結果である。

最後に、幼児図式に関連する特性は、原因帰属、生起感情に対する影響を通して、人間の援助行動を促進するという仮説に関して、まず、接近のしやすさ条件高低間では、援助選択に有意な差が生じていることを指摘することができる (Table 4)。ここでは、接近しやすい犬に対しては、より多くの援助選択がなされる傾向にあることが示されている。また、犬に対する接近のしやすさと援助

選択の相関分析においては (Table 5)、接近しやすく、かわいらしいと感じられるほど、援助行動がより多く選択される関連にあることが示されている。以上のような、犬に対する接近のしやすさと援助選択間の関連について、帰属認知、生起感情を媒介変数とする影響過程を検討するため行なわれた共分散構造分析の結果 (Figure 2)、能力・努力を媒介した援助選択に対する影響は確認することができず、幼児図式に関連する特性が帰属認知に影響を与えることで援助選択を促進するという、本研究における仮説は支持されていない。ただしその一方で、犬に対する接近のしやすさが援助行動に直接的に影響を及ぼし、さらに、犬に対する哀れみ感情を媒介する間接的影響も存在しているという点については支持する結果が得られている。接近のしやすさと援助行動間における哀れみ感情の媒介過程は、犬の幼児図式に関連する特性が人間の生起感情に変化をもたらす、援助行動を促進する方向で影響を与えるとする本研究の主題に大きく寄与する知見となっている。

以上のような結果から、全体を通して注意すべき点は、Lorenz (1971) が“生得的”であると表現した解発機構、つまり、何らかの経験の先行なしに、生まれながらにして種特異的に備わっている作用規範の過程が、犬に対する援助行動という文脈において色濃く反映されている点である。本研究では、援助行動を規定する要因として援助状況における生起感情を取り上げ、さらにこの感情を規定する変数として、援助行動の生起過程における帰属論的アプローチに示される援助要請の原因帰属に注目し、幼児図式に関連する特性がこれら一連の生起過程に対してどのように作用するのかについて検討したが、帰属認知に対する幼児図式の影響過程は見出すことができず、援助行動に対する媒介過程として働いていたのは犬に対する哀れみ感情のみである。また、これを上回る効果で幼児図式に関連する特性が、直接的に援助行動に対し影響している結果が示されており (Figure 2)、かわいらしいと認知される対象に対してはほとんど無条件的に援助行動の生起対象となることが示されている。Archer (1997) は人間と動物が社会生物学的には社会的寄生関係にあり、人間はペットによって操作されている可能性が十分にあると主張している。ここでいう操作とは、人間の動物に対する養育行動や援助行動を結果的に引き出す現象を指しているが、これを可能にするのが Lorenz (1971) の生得的解発刺激に代表される社会的リリーサーの存在である。社会的リリーサーは比較的単純な刺激であるが、寄生される宿主はこの刺激に対してほぼ自動的に反応せざるを得ない (Wilson, 1975)。本研究において示された、人間の援助行動における動物の幼児図式がもたらす影響過程は、この自動性をこそ反映

する結果であるとも考えられる。また、この自動性を確認した上で、犬に対する哀れみ感情を媒介した援助行動の促進も幼児図式に関連する特性が規定していると表現することができる。以上の結果は、動物の幼児図式が人間の援助行動に対して作用する影響過程について、一定の知見を与えるものである。

引用文献

- Archer, J. 1997 Why do people love their pets? *Evolution and Human Behavior*, 18, 237-259.
- Barnes, R. D., Ickes, W., & Kidd, R. F. 1979 Effects of the perceived intentionality and stability of another's dependency on helping behavior. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 5, 367-372.
- Berkowitz, L. 1969 Resistance to improper dependency relationships. *Journal of Experimental Social Psychology*, 5, 283-294.
- Betancourt, H. 1990 An attribution-empathy model of helping behavior: Behavioral intentions and judgments of help-giving. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 16, 573-591.
- Ickes, W. & Kidd, R. F. 1976 An attributional analysis of helping behavior. In J. H. Harvey, W. J. Ickes, & R. F. Kidd (Eds.), *New directions in attribution research, (Vol.1)*, Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum Associates. pp.311-334.
- 小嶋正敏 1983 援助行動の生起機制に関する帰属理論的分析; 原因帰属, 感情, 親交度の効果 早稲田大学心理学年報第 15 巻別冊, 31-42.
- Lorenz, K. 1971 *Studies in animal and human behaviour*. ; Translated by Robert Martin. Cambridge, Mass., Harvard University Press.
- Meyer, J. P. & Mulherin, A. 1980 From attribution to helping: An analysis of the mediating effects of affect and expectancy. *Journal of Personality and*

Social Psychology, 39, 201-210.

- 西川正之・高木修 1989 援助要請の原因帰属と親密性が援助行動に及ぼす効果 実験社会心理学研究, 28, 105-113.
- Reisenzein, R. 1986 A structural equation analysis of weiner's attribution-affect model of helping behavior. *Journal of Personality and Social Psychology*, 50, 1123-1133.
- Schmidt, G. & Weiner, B. 1988 An attribution-affect-action theory of behavior: Replications of judgment of help-giving. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 14, 610-621.
- Schopler, J. & Matthews, M. W. 1965 The influence of the perceived causal locus of partner's dependence on the use of interpersonal power. *Journal of Personality and Social Psychology*, 2, 609-612.
- Weiner, B. 1972 *Theories of motivation*. Chicago: Rand McNally.
- Weiner, B. 1980 A cognitive (attribution)-emotion-action model of motivated behavior: An analysis of judgements of help-giving. *Journal of Personality and Social Psychology*, 39, 186-200.
- Weiner, B. 1986 *An attributional theory of motivation and emotion*. New York: Springer-Verlag.
- Wilson, E. O. 1975 *Sociobiology* Cambridge, MA, Belknap Press of Harvard University Press. (伊藤嘉昭 監訳 1983-85 社会生物学1巻~5巻 思索社)

註

- 1) 本論文は、筆者の修士論文(2001年度大阪大学)の一部に加筆・修正を行ったものである。
- 2) 本論文の調査にあたり、摂南大学福田市朗教授、大阪大学秦政春教授に御協力頂きました。また本論文作成においては大阪大学大学院大坊郁夫教授に御指導頂きました。ここに深く感謝致します。

The effects of animal's trait related to baby schema on help-giver's attribution of the situation and on helping behavior

Wataru KISHIMOTO (*Graduate School of Human Sciences, Osaka University*)

The purpose of this study was to examine the effect of animal's trait related to baby schema on the help-giver's attribution of the help-needed situation and their helping behavior. In the questionnaire, pictures of dogs either with or without trait related to baby schema and a description of the help-needed situation was provided. Participants, 289 undergraduate and graduate students (145 males and 144 females), rated dog's controllability of the help-needed situation, the level of feeling pity and angry, and whether or not they will help the animal. The results indicated that the trait related to dog's baby schema didn't have an effect on participant's attributional cognition, and the effect of attributional cognition on emotion and helping behavior was very weak. At the same time, two effects of interest were found: a direct effect of dog's baby schema on pity emotion and helping behavior, and an indirect effect that a helping behavior was mediated by pity emotion. In sum, both effects indicate that the trait related to baby schema promoted human's helping behavior. These results suggested that the trait related to baby schema has a large effect on human's emotion and promotes human's helping behavior, without affecting attributions of the help-needed situation.

Keywords : helping behavior, attribution, baby schema , animal, pet